# 中國印度間の佛教徒の交通路

福原亮嚴

秦景憲は前漢哀帝若くは後漢明帝頃かの人と言はれ、佛經讀誦最初の人と傳說され、楚王英は後漢光武帝の子で、佛を祀つた始めの人、嚴佛調は南北朝（宋）の人で、佛經を最初譯した人、笮融は後漢獻帝頃に出た中國人建塔造像最初の人、朱士行は三國時代魏に出て、中國人中最初に出家し、又講經したと傳へられる。中國佛教の初期輸入時代には、恐らく此等の人々が夫々輩出し活躍したが、其後、引續き唐末迄は終始（多少の消長はあつたが）中國印度間に教徒多教が往來した。唐より後には、彼此の交通があまり記錄されない。今我々は佛教初傳以來、唐より後の若干の時期迄にかけて、中國より印度西域へ、印度西域より中國へ、如何やうに佛教徒が動き、又如何なる交通路を辿つたかを檢討したい。我々は中國印度間を旅行した佛教僧を左の二觀點より玆に調査を試みた。先づ中國僧で、西行求法した者は、第三世紀の朱士行以來、第十世紀末の繼業まで、僧名の知り得る者百七名を數へる。それとは逆に、西域印度方面より中國に來た諸外國僧で、飜譯に從事したとせられる第一世紀出世の安世高以來、飜經從事者は、第十四世紀迄に二百有餘名を數へ得る。僧名の知り得ない西行求法僧には、康法朗の同行者三名、智猛の同行十三名、曇學等の同行者六名、曇無竭の同行者二十三名、寶暹の同行者二名、求法高僧傳中僧名不明の十名、不空の同行者二十五名、繼業等の同行者約三百名があつたと言ふ。隨つて記錄に上つて居る兩地間の旅行僧は、約七百名弱である。然るに、記錄洩れの者も多かつたらうことは、恒河下流、迦濕彌羅、華氏城郊外等に漢寺といふ施設が存したといふ事實に依つても推測し得るであらう。此等の中、記錄に基づき、略〻その足跡の辿り得る者は、調査の結果約六十名がある。今その名を列擧すれば、Kumārajīva（鳩摩羅什）、Buddhabhadra（佛馱跋陀羅）、僧紹、Dharmarakṣa（曇無讖）、法顯、寶雲、智嚴、智猛、慧叡、沮渠京聲、Dharmavikrama（曇無竭）、道藥、法獻、惠生、宋雲、Jñānagupta（闍那崛多）、Narendrayasas（那連提黎耶舍、尊稱）、Dharmagupta（達摩笈多）、Prabhākaramitra（波羅頗伽羅密多羅、光智）、Punyopaya（布如烏伐耶、福生）、李無諂（Amāyā？）、Vajrabodhi（跋日羅菩提、金剛智）、Amoghavajra（阿目佉跋折羅、不空）、Prajñā（般刺若）、玄奘、玄照、道希、Dharmacandra（達磨戰涅羅、法月）、道方、道生、常愍、Matisiṃha（末底僧訶、師子慧）、玄會、僧隆、明遠、義朗、智岸、解脫天、巍沖、信胄、大乘燈、曇潤、義輝、慧輪、道琳、義淨、慧命、靈運、僧哲、智弘、無行、法振、慧超、悟空、繼業、Jñānabhadra（提納薄陀、禪賢、指空）、智光、Paṇḍitasaṃbhavaśrī（板的達散哈咱失里、具生吉祥）、bsodnams-

chos-rje（鎖喃嚷結、福德法主）等である。彼等の行程の多くは高僧傳に記載されてゐる。又詳しい記述は、佛教徒の手に成つた旅行記、卽ち法顯の『歷遊天竺記』一卷、玄奘の『大唐西域記』十二卷、慧立の『大慈恩寺三藏法師傳』十卷、彥琮箋、義淨の『南海寄歸內法傳』四卷、義淨の『大唐西行求法高僧傳』二卷、慧超の、敦煌石室發見の、『往五天竺國傳』三卷の殘卷、范成文の『吳船錄』に引用さるゝ繼業の『西域行程』の一部、酈道元の『水經注』に引用さるゝ道安の『西域志』の一部、其他、佛教僧ではないが、『法苑珠林』所載の王玄策の著した『中天竺行記』十卷の一部があり、尙又唐の道宣の『釋迦方志』二卷、南宋志磐撰『佛祖統紀』五十四卷等の西域地誌に出てゐる。旅行記、地誌關係の書を著した者の中、道安や道宣等の如く、直接實地踏査はしないのに、行程の詳細な記述のあるのは、恐らく中國印度間を旅行した誰かに聞きたゞし、或は諸書を參照研究して、集大成したといふ性質のものであらう。寶雲の『遊履外國傳』、曇景の『外國傳』五卷、智猛の『遊行外國傳』一卷、曇無竭（法勇）の『歷國傳記』、道普の『遊履異域傳』、法盛の『歷國傳』、道藥の『道藥傳』一卷、惠生の『惠生行傳』一卷、宋雲の『家記』一卷（以上の三書は『洛陽伽藍記』に一部引用）、無行の『史天附書』等の書も、嘗て存在したが、現在は散逸してしまつてゐる。

凡そ交通路に就いて其の開始時期を確定することは困難であるが、我々は今一般に人の通行した記錄あるものに就いて研究すべきである。此れは諸國が鼎立し、國交に變化を來す等の時代の狀況に依つて、通塞あることは亦止むを得ない。道宣（五九六―六六七）の『釋迦方志』には、西域の交通路として、東道、北道、中道の三を數へ、又『新唐書』地里志に賈耽（七三〇―八〇七）は中國から邊疆や外國に至る七道を示し、其中第五は安西入西域道、第六は安南通天竺道、第七は廣州通海夷道を揭げた。我々の調査に從へば、海陸合して大約六の交通路がある。

第一は天山北路で、もと新疆省拜城から出て、Issyk Kul 湖（or Issiq Köl 伊斯色克庫爾）に出で、Samarkand（撒馬罕）を經、Afghan（阿富汗）に入る路をいふ。しかも玄奘は長安を出發し、先づ武威・張掖・酒泉等の河西の廻廊地帶を通り、北方に向ひ伊吾（今の哈密 Hami, Qomul）、焉耆、龜茲（今の庫車）を經て、所謂天山北路を通り、撒馬罕、阿富汗を通過して入竺した。玄奘獨り能く此の迂囘路を取つた理由は、其の入竺當時突厥 Türkit が暴威を逞しうしたので、それを避ける爲と考へられる。今年松田壽男氏が『古代天山の歷史地理學的研究』を刊行されるので、此方面が明了になることと期待してゐる。

第二は西域渴槃陀 Kala-panja or kala-pandj を通る道である。此地は現今の支那 Turkistan の西南隅にあたる Yarkand（葉爾羌）河上流の Sarikol 谿谷、卽ち Tashkurgan（塔什霍爾罕）を中心とする地方に相當し、西域南道の要地で、葱嶺の南を越へて、Wakhan 谿谷に出で、西北印度や Tukhâristân に向ふ要驛である。之を、疏勒 Kashgar or kashkar 莎車（Gahjag？今の Yarkand）、于合（Sarugh-Chupan or Sarik-Chaupan. 今の Yarkand 地方で、莎車の南。アスガンサル流域）を夫々通過するものに細分出來る。宋雲・惠生等の入竺の往路も歸還路も賒彌國（疏勒）を通過、古く曇無竭も龜茲より沙勒（疏勒）に入り、葱嶺雪山を越へ、後世悟空も往還共にこゝを通つた。玄奘の印度よりの歸還路は莎車

を通つた。又法顯の往路は子合を通つた。此地域を通る交通路が古來最もよく用ひられたのは、他の通路に比し、多くの佛教國を經る便益と樂しさが有つた爲であらう。第五世紀には通行者多く、交通の主線をなしたのに、第七世紀は海路利用者が多かつた。

第三は于闐、罽賓間の近路である。卽ち Ladak（拉達克）より葱嶺をわたつて、迦濕彌羅に至る捷徑路である。『出三藏記集』智猛傳に、于闐より西南方に二千里で葱嶺に登り、次いで千七百里で波倫國へ、又南方千里で罽賓國に至るといふ。此の波倫國は北印度 Kashmir 州 Baltistan 地方に七・八世紀頃存した勃律國、『西域記』の鉢露羅國、『魏書』の波路國、『迦旃延說法沒盡偈經』の撥羅に相當しよう。便利な通路であるが、求法僧が餘り通らない。僧紹や寶雲は此の路を辿つた。

第四は吐蕃 Tibet から尼波羅 Nepal に通ずる路である。玄照は入竺後、弥伽河の北より信者寺を經て尼波羅國へ、そこから吐蕃に出て洛陽に還つた。此の通路が初唐に通じたのは、文成公主の保護に依つた。道生、師子慧、玄會等も亦印度の還り路、こゝを通る時死亡した。後世、繼業は（『吳船錄』參照）印度より還るに、華氏城 Patna、恒河、毘耶離城、多羅聚落、泥波羅國 Katmandu、摩偸果 Matang 聚落、雪山、西藏、三耶寺（拉薩東南）を經た。恐らく其次の順路は青海を縱斷しないで、拉薩、察木多、甘孜、道孚、松藩、階州（武都）を經て、長安に到達したものと考へられる。此に關しては『支那佛教史學』三の一に足立喜六氏の論文がある。

第五は雲南を經、緬甸を過ぎる所謂滇緬路である。『求法高僧傳』に記す如く、唐僧二十人計りは此路を辿つた。此れは蜀川、牂牁道より國外に出るもの、卽ち雲南より緬甸を經印度に入るもので、昔張騫が開通に失敗したものである。此れは東晉時代に開通した一通路である。慧叡傳に依れば、慧叡も蜀の西界から南天竺に至つたといふ。『新唐書』地里志の安南通天竺道の說明は、安南卽ち今の河內の境より八平城、曲江（劍南の地）、晉寧驛（戎州の地）、柘東城（昆明）、羊苴 城（大理）、永昌故城、怒江、諸葛亮城に至り、そこから二道が分岐する。第一は西南路で、樂城、悉利城、驃國 Burma、里山（Arakan 山脈）を經て東天竺の迦摩波（Kamarupa, 今の Assam）國に至る。第二は西路で、騰充城（騰越）、彌城、麗水城、安西城、彌諾江水、大秦波羅門國を經て東天竺北界の箇沒盧回 Kamarupa に至る。前記唐僧二十名は長安を發し、武都、成都附近を通り、此の地里志から推測される如く、昆明、大理を經、多分八莫附近から緬甸に、それから入竺したであらう。提納薄陀（指空）は、印度を發し、禰伽羅國、雪山、西蕃境、西蕃摩提耶城、班特達 Paṇḍita、伽單、蝦城、大毒河、羅羅斯地界、金沙河關、雲南城、大理國、安寧州、更に中慶路を經て貴州亢帥府、鎭遠府、次いで常德路を通り、洞庭湖、盧山、楊州、灤京（河北）に至つてゐる。

第六は海路で、此れは中國に佛教が入つてから、始終を通じて多く用ひられた。之には、廣州より出發する例が最も多く、義淨、不空等は往復共此路に依つた。殊に唐代諸僧中大部分が此路を取つた。前揭の地里志に「廣州通海夷道」があり、これで寄港地が判るが、今は省略する。安南より出發する例もあつて、明遠の往路、覺賢が中國に來た時の通路はこれである。更に又青島から出發するものがあり、道普の二回目の出發は之に從つた。又、法顯は印度よりこの海路によつて還つた。以上佛教徒が古來辿つた通路六についてて概觀したが、地圖を載せ得なかつたのは殘念である。